

關東古戰錄

十



L10  
P. 3



關東古戦録卷之十



目錄

一 小指半七郎横死

附 西田伊豆病死之事

二 武藏國鴻巣合戦

附 霧浪逸平付死之事

三 義連與北条氏康和融

附 長尾為明使節之事

四 一色右郎左衛門時範水死

附 妻女貞烈之事

五 足利右京亮源義連逝去

附 長尾監物為明死去

兵 奥方自教竹沢泉崎殉死事

六 鹿嶋忍次郎討死附 小張落城事

七 足利竜丸城戸次郎右郎持廣入水

附 鷲塚熊太郎以下義士死亡事

八 新館燒也

附 山形八郎季照夫婦義死事

関東古戦録卷之十

小指半七郎横死附西田伊豆病死之事

新館六人数を休息なごめんが為よ一五年戦伐不

く只國事の筋を記し人民を安育し慈恩敷里よき

浸ふ所の大小上下恩徳小治して幼児の母衣を慕ふが如

く。悪城の徳士小指半七郎が劔術を懇望しよろま

城へ招度より相死小よりと義連義知あつて小指常に

城中小往來して指南せり。は時成回家小之劔術の達

者なる由きて悪典猪と云るを抱たり。先年山形を

逸し鹿嶋が太刀先を外して逃亡し曲者なり。飽

ましく高慢なりたれ。諸人あれを悪て小指と立合せ

て其慶言を塞んと。双方よりあつらひて。竟し仕合か

す。小指立金し何事なく打掛けるを典孫極く小倭言  
 を以て負よあらむとせとせ。小指女も尊ふとなく。彼ら望  
 小任せく。数度打合ふと云た。突小天淵の島下いかん  
 こもも盛からず。流石の典孫唯伏して小指門人となり。  
 常ふおれを習へり。然るに諸士の同邪惡の者七八人典孫  
 が弟子となり居しが。借人小指の術を賞養するを願ふ  
 密に典孫小指の術を賞養するを願ふ。小指がと  
 さいん人あらず。彼有ふよの貴公の術を人稱する  
 となり。小指さへ笑ひ。貴公の名天下に顯ると述べれば  
 元來強欲不敵の典孫大よろおづき。是誠小指よりこれ  
 を教の手股容易よあらむと。百一打果んとあらば。中々教  
 十人を必くも及ぶと。貴殿らいつかる工夫ある一人の

曰毒酒よとくとす。我門人となり。役事と号して毒  
 酒を盛り。人知せど笑んと。手殿細くと語ら。典孫始  
 一座回かして。其用意をなす。よらる。或時小指城中へ來  
 る時。件のあせ者之入門人となり。恭敬他小異なれば。小  
 指も一入よ心をそへく指南せり。春の日は花宴の時となり。  
 彼之人の弟子の養應めて近き酒を進んると云。小指大  
 小悦約懇して其目を待よ。時至くと彼之人誘引し。諸門人  
 とお連と。山を巻く花を誦して。終日かりくらじ。夕日傾  
 く時となりて。山の端は煙を布せ。眺望の所小く一獻を進  
 めけふ。小指真よ紫て引受く。呑め。密に毒酒を引替  
 てられを酌ふ。何がや心の附る。二三杯終て不覺。忽心神  
 惱乱して。身体己よ紫色になれば。急度心付。彼之人を迄

とねめ付何の意趣ありて師は毒酒を盛たるなり。全く典  
 籍が業なるべし。真直は申へしと怒まる眼天火の如く。こ  
 人刃鋒きくんで是非なく巧の次子を折きハ。そは八幡  
 も照覧あれ典籍の如く。と立上れども毒を以て。深渡  
 り。是全く立上れば。大は叫で天下艸創の業を佐け。百世  
 功を残んと思ふも。一匹夫の為。はうられ。後は大死は及  
 ばず。猶念至極と箇箇をなすと。本蔭は怒。五人の者急は欠  
 出一回。半七郎を唾下へ突落す。丈餘の涯を鳥のめく  
 小飛より。接より早く二人を切傷し。二人を取て小狼は捨  
 込。一編志めて突放せば。目により血を吐たり。残る二人逃  
 きて遙は何へハ。仁王立。突立。木口を杖まつさ。かか。竟  
 小空く。なりよける。生年。正四葉。惜むべし。そ双の英士。よて。

信義を踏て名將は後ひ功半。及とて。英人の為。是非命  
 の死を。天道。豈非。なり。とせん。ら。は時。義連。春夕。を破  
 で。亭。は。登り。長尾。城。戸。山。形。と。眺。望。あり。し。薄。暮。小。及  
 と。北。斗。七。星。の。内。長。く。走。て。大。地。は。落。たり。至。後。怪。ける  
 小。為。明。立。上。て。あ。れ。を。望。む。南。無。之。室。小。指。半。七。良。死。た。る  
 う。如。何。なる。こと。う。出。来。し。と。云。ふ。義。連。大。は。名。は。掛。給。ひ。軍  
 師。何。事。を。う。程。言。を。述。ると。の。給。へ。長。尾。取。て。あ。れ。英。士  
 死。る。の。徴。なり。其。落。る。所。惡。城。の。邊。なる。故。これ。小。應。る。者  
 小。指。外。は。あ。る。ま。じ。と。申。上。れ。ハ。城。戸。山。形。大。は。驚。き。あ。ま  
 人を。飛。せ。く。倒。し。む。る。に。小。指。惡。城。の。士。と。闘。争。し。及。て。死。亡  
 せり。に。折。き。ハ。義。連。滿。面。は。涙。を。流。へ。給。へ。ハ。三。臣。同。く。落。後  
 せり。一。色。時。範。あ。ま。し。く。欠。来。り。て。察。る。所。成。田。が。所。為。

ありて一押迫でく切敷し、若懐を教んこ怒る暇小涙  
 をもらくこ流せりてらまは義連も一同小指を打せて坐て  
 何のせんあらんこ城戸も山形も立上るを長尾漸し押止  
 め御懐いさるとなれた事の突吾も紀されど、吾作の業  
 を新し小指が忠義もさくありなん、能く事を穿鑿して  
 義のある所は任すべしと様々陳れらるる、主従合点し落て  
 愁涙の外他事なり、翌早天は成田下総より、半窪を  
 使節として三人の家士を召捕これ小指半七郎を毒殺せ  
 し同類なり、うやうやしく控議をこけられ急度刑し行る  
 事、昨夕新参の忍曲語に申者出奔して行急志れど、  
典据甲及よまて  
或田家よりくま股法の臣妾死の改義連の賢慮察入長春同  
 候よ是恨斜どと細述れが義連よきよ挨拶あり、三人

を考問して尋る小く白状し及し、欠然らハ成田は別心  
 ずしと、三人を極刑小行と成田方へ附使を送り、小指  
 の遺骸を葬り、自ら念以り吊ひ給ひらる、時をく英士  
 命を損せ如何ともとて、西田伊豆義連は後し  
 より、主を導て長尾の智謀に心酔し、忠義の心堅固な  
 て、度々の戦小為明が意は能通してあれを輔け、五  
 英よかららうりけきバ、義連近臣の伺みくも、殊に若教を  
 命し心腹の謀臣たりらるる、過り以り病に犯されて  
 別解自由ならず、既に命教の限なるを悟て、密に長  
 尾残抱く、其不才なりといふ、聊大志を抱て、忠君を捕  
 伏せんとせし、教養を五我不得心快くして、樂に  
 まじ、是ら先生の教諭にあり、軍器の奥を悟り、遂

小若君は運て大馬の如を辱は命数限りありて今既に  
英泉の害と行る上は明主在之中賢師は後以下英傑  
已更を繕ふ勇士の念歎何うこれに我ととあらんや  
唯大業を成らざりて世を早よと悲恨云々今  
先生を招て教目の教恩を謝し且一言を吐く忠志を表  
す近頃小権半七郎横死をなす自ら怯を失ふと云  
彼は英智何う奸人の為は謀りれんや正は是天命の  
る所なり創業の初一英傑を失す思ふは大業全加らざ  
らんり殊更を公迫来軍務小精神を滅し容顔稍憔悴と  
百大病一度發せしる体計多うならず其病惱頻ありと  
いふは身体之苦患を忘れて唯主公の衰容を悲し先  
生必慮ありと瘡養かくる所なりと云んは心内穩

ならず先生の一書を聞て末期の慈を教人と涙を流て  
語り々るふ為明潜然とと足下の智勇忠信世は此  
頼はくやういかんが天此良士を奪て君の大業を妨る  
や抑玉君の起り給ふと元將の頼はくあらば其身質  
して英傑をの如く集る天意豈にせずとあらんや然  
大業の初英士を失ひ玉君の弱質病源既はあらはる其  
症醫業の及ぶ所はあらば唯神氣の玉を待のこ  
天命の教人間智力の及ぶ所はあらば玉君の疲弱一時  
小常は復しむ某一つの大謀あり期年申して東國を  
平治なまへし是下心を安んして勤く醫業を興へし  
也此日暫く軍器を徒して立俾れハ伊豆も快けし見  
送りたるが夜も入師等を召呼て我死期正は至れり汝

ら今よりして為明より後之程更に小忠を尽せしこと  
 終て忽然として歿したり生年五十八歳なり西回生實  
 沈愴小して謀畧人は務る一度誤て暗きにはるべき事  
 力を尽して功を現し義連より忠信全く計畧の  
 功甚多しといふ其十一を傳系と惜むべし義連を以て  
 大に悲傷あり小指を失て久くかたじけなくして西回亦歿し我  
 一臂既たて多り後未だんぬべしと数日の間背陶として  
 氣力かのつら減りける

武藏國鴻巣合戦附 霧浪逸平討死之事

弘治元年成田下総守小田原へ信る折々玉繩の城主  
 北条左衛門大夫綱成同く奮勤す先達て常陸の一戦  
 小利を失し所其後足利義連大に勝利を得りければ

偏袒の情あり又ハ國家後の禍くるとの思慮も氏  
 康へ勸めこれを征せんと言ふ氏康成田を尋ねし長春  
 謹て始末を語り大義を踏んで聊の道よ永遠の威风跡  
 家臣の智謀委く語り却て氏康より懇命あらば始終  
 國家の補くると言ふとこれバ元來一代の名將兼て忠  
 を以て傳へ聞所と成田が演説符合をせバ綱成が矢見  
 を用て却て和通あらんを願はれば綱成えより當家よ  
 て数武砦をあらはせし猛臣なれば密に手勢を引て討  
 立日善里の城主富永四郎左衛門と合伴し然るして  
 下り行成田を圍て大に驚き今氏康より許ても押寄  
 し綱成君命さうさる所ありあらば義連より軍を氏康  
 の心よりのことを通るを義のある所なりと一封の書

をなりて、恐は持せしむ、これを破る、義連の方より、長尾の  
 透波早此事を告りし、バ義連、兵見を向給、所は成  
 田が書到来して、おれを困りて、大は悦給ひ、成田は、多は信  
 義の将なり、と寝る、ある長尾申、多は、おかくの、とくする、時  
 は、多は痛く、當て、黄八幡、泡うせ、再、高家へ、手指、す、さる  
 極、ま、おかく、と、多は、死を、う、なり、たり、り、山形八郎、季照、よ  
 三百人を、附く、一番、よ、討せ、二番、よ、一色、右、郎、左、衛、門、二、百、人  
 に、く、續、り、り、三、番、よ、長、尾、監、物、二、百、人、霧、浪、逸、平、原、十、七、  
 夫、百、人、で、左、右、の、備、都、合、主、勢、九、百、人、義、連、の、城、戸、を、た、り、  
 鎧、は、残り、戦、烈、く、い、へ、ん、兵、を、清、く、べ、き、約、法、し、て、鴻、巣、へ  
 押、出、し、て、陣、を、屯、し、と、打、立、り、り、去、程、よ、北、条、右、衛、門、共、  
 八、幡、の、旗、を、押、立、て、猛、虎、の、威、を、著、し、て、多、勢、百、五、十、騎、雅

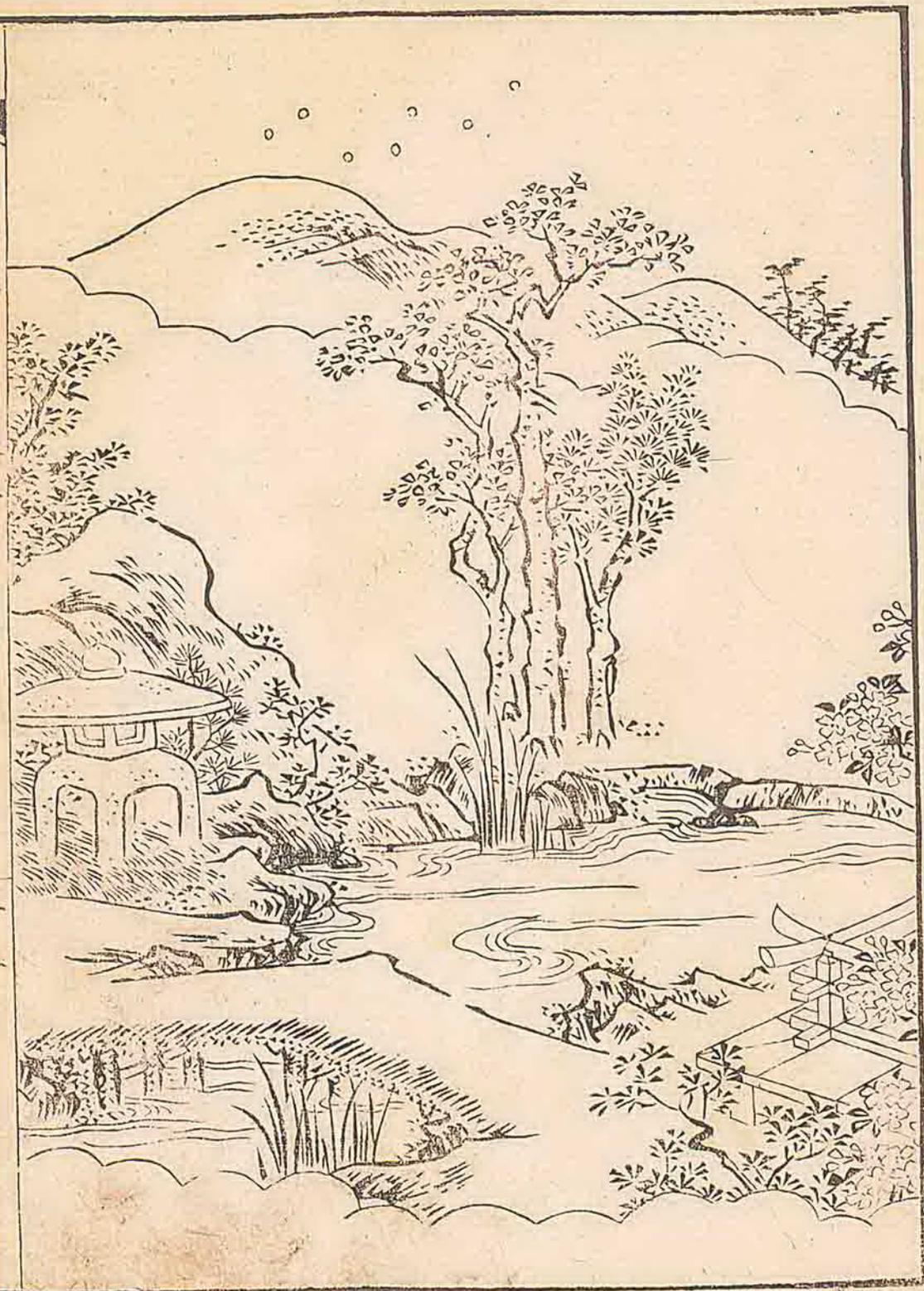
兵、千、餘、二、段、の、備、で、押、来、る、富、永、は、多、勢、二、千、人、後、陣、を、靜  
 け、打、せ、り、恐、の、城、よ、い、ゑ、て、命、令、が、あり、ん、城、門、を、困、て  
 一、人、も、出、る、者、な、し、右、軍、鴻、巣、よ、て、獨、り、く、つ、と、お、合、討、の  
 意、を、上、よ、り、り、山、形、八、郎、陣、は、馬、乘、出、し、り、お、か、し  
 き、網、成、敷、の、出、陣、高、家、へ、い、く、や、る、恨、み、あ、る、義、人、と、争、む、バ  
 網、成、因、り、馬、上、よ、て、主、命、よ、り、り、向、り、り、敵、も、あ、ら、ぬ  
 一、揆、系、降、参、し、て、命、を、継、げ、と、く、さ、げ、よ、旬、れ、バ、山、形、右  
 と、矢、打、つ、が、ひ、能、武、者、の、り、勢、を、見、せ、て、後、の、叫、ぶ、せ、よ、と  
 引、志、げ、の、り、切、く、放、し、と、矢、遠、く、し、て、ま、先、よ、立、た、る、若、武  
 者、の、相、援、を、か、け、て、射、通、し、て、後、よ、り、り、歩、武、者、の、首、の  
 骨、を、射、切、し、六、二、人、忽、ち、倒、れ、て、死、し、流、石、の、網、成、敷、を、破、  
 し、我、数、率、の、戦、小、か、く、の、と、さ、り、勢、を、終、よ、り、り、る、骨、は、

他族軍をなほとあつらん人種ハ有まじき事。惣掛り小なる  
 べしと。先きの五百人一回は湖の湧くとく小押果しり。八郎  
 下知して弓率を一面は折ちを。古間引下して總武者を地  
 小平もや。あつらん伏しり。待掛しり。大勢の奇は平奇  
 小押来るを十分は引掛てら。是煙一回は戦を上て。差法は  
 射立れば。其後より六七挺の鉄炮を次第を立て打掛ま。バ  
 番の子打つる。ごとき人教あざ矢なく。手負死人百人を及  
 けり。去る細成下知を。死人を踏蹴しり。鉄へ鎧を入  
 り。猪たぐると呼われ。いり。り。をの掛武者は。何は。願  
 れ。尻の吹落せ。とく。は。欠。造て。ら。の人。教へ。突。迎。し。り。急。ぎ。相  
 圖の事なれば。弓鉄の足物。た。ち。へ。あ。ま。り。逃。散。れ。バ。衆。は  
 相違し。間を隔く。総武者。魚鱗。は。備。て。並。居。し。り。既。上

小旗旗を掩ひ。と勢繁然たり。敵の武者改めけし。と  
 勢も。と。む。を。所。へ。山。形。頻。て。下。知。され。バ。一。回。は。起。立。て  
 矢を射る。とく。突て。あ。る。其。勢。向。ひ。近。付。あ。ら。う。と。細。成  
 が。先。陣。五。百。人。急。ぎ。押。し。ら。れ。是。並。あ。れ。と。公。軍。と。八。郎。の  
 けり。と。馬。は。打。あ。り。千。葉。馬。と。胸。固。回。り。水。を。踏。し。り。て  
 究竟の騎馬は。五騎。らん。を。並。く。あ。ま。り。勢。へ。突。入。た  
 ち。よ。り。切。ぎ。と。弛。散。せ。バ。血。ハ。流。て。川。の。ど。く。尻。ハ。積。ん。て。山  
 を。な。せ。り。細。成。大。は。怒。と。二。の。見。の。人。数。を。深。智。て。山。形。が  
 勢。を。ま。中。ま。ね。團。心。ゆ。り。と。騎。馬。を。一。所。は。集。つ。と。山  
 形。美。先。子。を。一。声。呼。び。た。刀。振。上。て。馬。上。の。武。者。六。七。騎  
 一。と。切。と。落。し。一。鞭。ら。れ。て。衆。分。れ。て。山。形。と。あ。ら。た。ち。よ  
 分。れ。難。し。く。古。五。騎。の。兵。薄。ま。も。負。を。打。と。り。細。成

下知して追討は進んとする所へ一色時範が一軍打て  
 掛り一回は突立れば馬足は掛られ隊伍乱まき北条勢  
 人数悉くむれ立て應じると能はむ。ゆゑに加へしと  
 右馬左勝つ美走は兼て大右刀を振り廻しあつるを  
 牽は難儀せばし路獅子王が怒りをかき百獸のを伸へ  
 馳入るも有さまゆとびた刀先は出る者二人三人おぼされ  
 ごとと云と下り細成今ハ叶ハトと先引されと下知する  
 所へ一色一鳥は孤寡て守傳ふる貴ハ備ゆりそりと切て  
 掛る細成も槍押る暫く戦と刃々たるが情も鬼神の如く  
 なれば忽ち氣をくれして馬引へして逃行をいひこまて  
 りと追ひつゝ細成は近士七八人踏止つてこれを追ま残り  
 ぞた名切倒さるる内は細成ハ後陣をさして逃走はた

將逃て軍兵は秋の本葉のとくめく村いなりと逃ちまき  
 傍時を作りけり人数を屯し待をこり富永は由見あり  
 も大軍を進て押来るをひれ一色一軍となり森の本立  
 を追よあて敵く備と待くれれば手並よりり敵の  
 人数たたりも掛り急ぎあめらう所へ川のまんなかハ  
 長尾が明間道を回く敵の後ハ頭れ旗押立て貝鼓をな  
 らし時をいひとよられハ一色山形回く時を合つて一回は  
 突かれバ大軍のくせりて進退自由はあらされハ富  
 永馬上は氣をいらち二軍はかれと下知させと混雜し  
 て備の形益窮れて見くられハ前後あり突て入る掛  
 援左へ馳と縦横に操られハ大勢十方を失く回士打の  
 外更になし英士は將死をのどく掛ぬハ根練の人数



風吹のこく少く富永忽突襲され。八方へ逃され。細成  
大に傍り。敗軍を集めて二度掛んとする所へ思もならず  
た右より霧浪原打と出。細成の人数を四角八方へ掛散  
す。細成今ハ惶方なく。只討死と覚悟して。霧浪に切て掛  
る。逸平泊りと打合せ。誓く勵んで戦し。運の極々霧  
浪石よつまのさ。まらぶ所を細成まうさ。打太刀は肩  
さたより切さげられ。その油。そこふをれ。一色あれをこ  
る。あまを。そのと。く。あま。ま。向より打太刀を細成ひ  
らいと戦い。清太刀ふなりて。あま。一刀討まんや  
見る所へ。武者。霧計。火。さ。引合れ。一色怒て。按  
り。ぐりに。拂ひ。五十。騎。余り。微塵。小。切散。と。同。細成  
馬。鞭。を。當て。跡。をも。見。せ。ど。逃。行。たり。長尾。人数。を。ま

と。内。く。隊。伍。を。揃へ。原。十。太。夫。一。番。進。ん。ど。追。討。せ。ら。れ。よ  
敵。一。支。も。こ。へ。も。五。千。は。近。き。大。軍。の。土。の。崩。る。如。く  
少。し。捕。り。さ。し。と。落。行。し。見。苦。し。り。な。る。次。身。打。り。長  
尾。務。軍。の。人。数。を。納。め。懸。検。せ。る。に。霧。浪。を。始。り。て。味  
方の。討。死。百。廿。餘。人。寄。手。の。討。死。騎。馬。以。て。二。百。廿。人。雜。兵  
十。餘。人。と。記。さ。る。富。永。北。条。再。戦。屋。さ。氣。力。も。た。り。く。と。こ  
と。目。暮。里。を。絶へ。帰。り。る。よ。し。な。き。事。を。仕。立。て。武。名  
の。體。を。取。ら。れ。ど。も。合。戦。人。傳へ。せ。り。て。汚。名。を。掩。ふ。こと  
誠。よ。天。幸。と。さ。ら。し。ま。す。

義連与北条氏康和融附長尾為明使節

英富永同卷之事

断て長尾為明務軍を納て新館へ帰陣たりせば義連

一、つらう選て其功の速なるを稱し、高岩の諸將、騎士、歩卒に  
 至まで厚く褒賞あり。霧浪が討死を惜み、悲し自ら厚く  
 弔ひ給ひ、其上に長く長尾は宣ひたるは、此度の一戦、勝利を  
 得るふよのりて、氏康を仇とするの心なりとも、必電將  
 の怨軍は怒て重て大軍をさう、向つたられ、應多計や  
 あると尋給ふよ、為明、承く賢察のどく、氏康懐て兵を  
 起し奉り、以の外の大事よ、及ん果おりよ、富永、北条  
 の二將、多く君命を受て、兵を起し、ぬれば、却て、野軍  
 を社と、氏康は、所ふ、危むるぞ、然れ、山度の一戦、諸人の知  
 る所なれば、必氏康、これを困と、其、修よ、いさ、置べらう  
 す、今や、味方、登天の勢ありと、さへとも、激勢を、以、と、極  
 勢の、名將と、戦を決せん、と、甚危る、さへ、一旦、成回、よ、の

て、和手、を、淡し、敵を、正くして、義を示し、軍、被り、懐  
 を、起して、和手、小心なく、兵を、起さば、曲ると、被ふあり、正  
 兵を、以、と、運兵、よ、對せ、百、百と、さへ、在、恐るに、足る、危らう  
 す、某、君命を、奉と、一先、成回、が、方へ、行、彼と、事、を、謀  
 るべし、と、云、ければ、義、連も、其、意、を、後、ひ、夫、より、為、明、恩の  
 城へ、至り、姓名を、あ、ぐ、られ、下、總守、早、建、對面、なり、と、此  
 梁の、勝利、械、を、感、ざるに、お、ゆり、あり、然、ち、あ、將、君、命、に  
 背、く、怨、軍、を、な、す、と、い、る、者、百、一、お、れ、り、氏、康、に、辨、指  
 と、な、ら、う、某、も、今、さ、の、好、を、絶、と、寇、仇、の、刃、を、交、由、な、と  
 義、氣、凜、然、と、して、申、され、られ、長、尾、種、で、義、連、某、を、以  
 て、申、する、の、意、趣、も、賢、慮、の、止、從、來、君、と、交、を、結、ん、て  
 右、山、の、後、援、を、ぬ、たり、然、る、よ、は、度、あ、將、不、意、の、兵、を、率、

て廻り来る和平を頼みにしうなしやむとをゆきして  
 防戦し不幸小して猶利をゆきし後、義連、氏康、おどおど  
 を執して、大軍を看向られ、武道の義理、善兵といふ  
 快く死戦を遂ん、然る時、元寇求むて、大敵を討け、且  
 忍と信義の交を絶と、突は義連、本意、あらずと、先を  
 て、忍の忠告を考る、対は氏康、朝臣、當家を滅す、心なきこと  
 明らかかり、あを以て、忍より、以て、忍、兼、和平の約を許  
 給ひ、本懐、あれ、過と、然共、不慮に、あ將を、送り、めて、  
 却く、和平を、個人とせば、益、氏康、朝臣の、賢慮、あ、居ん、偏  
 は、忍の、慮、は、な、ま、あ、と、義連の、意、斯の、と、と、率、理、を、明  
 述、られ、成、回、傾、き、固、て、誠、は、義連の、義、勇、道、中、ま、の、  
 正、し、と、天下の、智、謀、家、は、天下、忍、臣の、龜、鑑、なり、義連の、意

和平を望給ひ、我思ふ所と符合せり、一書を絶く、歴形の  
 意を伺ふ、身と念ひ、より、て、あ、な、れ、ば、長尾、終、附、て、立、停  
 り、其、音、を、義連、は、達、し、な、れ、ば、大、は、悦、給、ひ、成、回、が、消息、を、待  
 待、り、数、日、の、後、下、総、守、り、牛、産、を、以、て、和平、の、と、氏、康  
 領、事、あ、り、て、長尾、監、物、小、對、面、あ、り、ま、さ、由、な、れ、ば、急、ぎ、思、城  
 と、來、ら、ま、あ、り、下、總、守、体、で、小、田、東、へ、越、く、急、ぎ、由、委、細、軍  
 越、な、れ、ば、義連、長尾、小、向、て、和平、成就、は、好、む、所、な、れ、た、知、道  
 を、相、次、と、考、ま、さ、ん、と、心、憂、所、な、り、と、あり、な、れ、ば、為、明、笑  
 と、其、を、招、こ、う、事、な、れ、行、く、氏、康、の、器、量、を、窺、ひ、徳、將、の  
 伎、倆、を、鑑、定、し、必、し、も、脚、心、を、苦、め、な、れ、と、い、ふ、應、答、あ  
 る、あ、り、と、い、ふ、あ、り、な、れ、ば、義連、も、か、た、く、牛、産、は、對、面、あ、り、て、  
 驚、く、謝、辭、を、受、て、り、て、な、り、給、ひ、牛、産、を、ゆ、り、めて、後

長尾俄も縁装して立出んとするも義連頻り小心を安  
 給など一色城戸山形が肉を差添らえき由なれ大為明  
 られを辞して義連の氣を安んが為近臣の肉替堀籠  
 右郎志賀彦惣石里彈右衛門を伴て僅も千人計を百具  
 して忍城に至りければ成田子連お立ちありて相州へ趣け  
 去程に小田原の屋形六氏康諸將を百呼給ひ足利義  
 連が謀臣長尾監物を成田下総お伴ひ奉りて和平の意  
 を通すべしとなり彼ハ少由も文武の智者若無禮の言を  
 祭す家意を落すべしと命し給ひ武備堂くろりて  
 屋形の威儀目さゆくろり見せにける長尾ハ成田ら  
 案内よく登城なり一間は階ぐ入きて成田ハ奥へ入り  
 ぬ北条家よく宗徒の英士各對面して姓名を尋り武

界戦法經濟の論録のどろ突まれば長尾從容くして向  
 後てこれを弁解なせば各困りして悉く報後と暫あつ  
 て富家先手の猛將富永四郎左衛門威儀を致して立出姓  
 名を述べれば長尾これを伺ふ相親堂くろりて勇威腹中  
 は現れ觀慈くも勇將なり為明懐く礼を述べきば富  
 永が回去次鴻巣に於ては痛き合戦は敗軍をさげ突ふ  
 面目を失ふと云へた主君は度義連と和平あれは其苦一  
 毫の恨をさしなまさまど向後水魚の交を結ゆ去り  
 てもそ敵の軍配凡人の所為にあらず誠は天下の軍  
 師なり如何に義連の下とき村野の人は從てますを  
 後よ折吉しむ珠玉を泥中へ投るひら明主山政め  
 仕へ其器天下は現く入しとのひれば為明答て其が智

亦聊も人よ類するの所なり。且主人義連野人の由其家  
 を乞ふれば誰も窮るゝかひなし。義連民間に成立るはと云  
 大正しく是利成氏公の嫡孫もく。濱りける所の家の族  
 家室の志刀ありと。出所の正さしと當世大國を領する諸  
 將よりも著し。殊更生れ付洛達ふして威惠兼備る吉の  
 賢將と稱する人も恐らくは其右よ出るよものごとく夫當  
 士の血を求む氏系正しき人の賢なるもの二つよ  
 出で。義連二つありて金く備る實は難いと思なり。それ  
 ぐし奉りしれは侍も只不肖ゆして君徳を類するたれ  
 と連れば富永回今義連の軍勢いづ程ある。若回家  
 士八九百のこ。富永若て千よ満するの人数を以他の諸  
 侯と抗衡せんと思。小國の堅固ハ大國の搦とあり。甚危

小あらしもや。為明回ちるらず。八九百の士皆腹心の人あり。千  
 英百雄の兵なり。此外麾下の將集會の人数小及で。正  
 兵五千人よ至るべし。勝敗はんが多寡小なり。正兵ハ一  
 戦利を以ると。兵衆不期して來會也。安兵ハ一度敗む  
 る時ハ衆兵散じて数殘ふする。前年義連成回の杉よよ  
 つて総別は戦て。小田智十倍の人数を切斷せり。故に常  
 総響のこくは應じて麾下にうんととせるの將をくな  
 り。と。唯士卒の鍛練号令の正さしあるもの。何ぞ寡兵  
 をうれへんや。富永回并底の陸外小なり。一旦小田將よ  
 獨を取るとさへ天下よ名將多し。何ぞ皆小田のこく  
 たりん。彼を以て是よ及すハ得るに近う。とや。為明回  
 其言いられある。小知され。當時天下の名將甲兵の情信

戦後の景虎申國の元就と當屋形なり。屋形の諸將の内  
日暮里玉繩忍の二將英名を震へ始成田氏夜軍を備へて  
大敗あり心服して和平となり。今や一族のどし。其後北条  
氏と君数千人を以て不意に戦を進む義連某の命じて  
小人数を以て平場は勝利を以てり。然れハ天下の名將  
の兵と云者亦恐るるは是れなり。似たりと云ふ事ハ答々れ  
ハ富永洞なく赤面して退きぬ誓ありて。氏康朝臣上殿  
の間は着座ありて長尾を以て對面ありければ為明通は  
跪き多く終れ。恭敬ありありありて恐るる色女もやうし  
氏康。宣ひけりハ義連ハ向近く公方の氏族某は於て  
聊疎畧の心なり。今度通向あるべき旨下総守傳る所  
を因て義連の意旨誠は遠くふる所なり。而後一季の

思をなす。急後共は相助らんと念ひありければ為明  
憤て辞諾し上意の執主人義連が心存と符合し。満  
悦したくも。殊に匹夫の某公前小連て咫尺小將の尊  
顔を拜す。何の幸なればと云ふらんと申されば氏康大に喜  
悦ありて。汝が智謀計畧其事跡を尋問ふ古今絶倫也  
以東攻城野戦の時君が為小必謀畧を思ふべしとあれば  
為明言を憶ぐ尊命過當の責を宣ふ。慚愧不堪なり。然  
共人苦心ありて。只其主の為に謀る義連用て益をばせ大  
公は在て益あると云ふ。屋形ハ自ら智臣吉人は能く  
あり。某がめき大國の謀は及ぶと。憚る所なく。速に其ハ  
氏康深感嘆ありて。彼は東國の奇才なりと云ふ。終ハ  
義連への應答ありて。賜を給りければ為明は伏し



人を引立て命買かの奴原早く降く富永小湊多しと小  
 鬼のとくに投つづき赦せし四人夫は恐をなく跡をも見  
 せりて逃ぎぬ成田横手を抱て先生の見方の妙之士の  
 勇力誠に世は稀なりと嘆息して道を早め鴻巣あそ  
 別は望まじき長尾丁寧に成田の旁を附して夫より  
 引分れ行々るが境にかれ八日既暮るる長尾遙小北  
 方を望まじく馬を止めり嗚呼余なる哉と云送り一奇  
 大は叫で馬より逆さるる落れれば警振始大は警  
 抱上るる多く血を吐て病氣以外なりとバ急き介抱  
 て宿所小帰れば義連大は悲給ひみづら病を向給  
 りは時長尾既正氣とかり義連は恩を謝し小田原の  
 横手委細言上りて氣力常は復しけれ八限りなく森

給ひ鶴へ帰られけれバ為明其夜密に郎等森の權三郎  
 を百て天の命数己は尽く吾久しうらずして死に至る人  
 百一我死より共汝殉死をせしむる二荒山隠れて吾  
 傳し兵法を人を授け教し後世は道を残さへし必背く  
 とすれに余はこれに權三郎は然らして夫のあやし  
 其故を問へた竟は語らむ力なく泣啼して應諾し心細  
 氣は退去しり

一色右郎左衛門時範水死附妻女貞烈之事

鴻巣の一戦勝利ありしより義連の武名近國は由法  
 ありて武勇の徳将和乎と密に使を馳せ好むを綴  
 と甚多し義連の創業爰は固陋き勢あり多岐若家  
 よる長軍の如しと使者を差越せしより附致と

して一色太尉左衛門時範余を以て下妻へ封じ置る重政  
 を始諸士間近く時範は對面し其人と打ち俥備なるふ  
 驚き種々武業怪力を望てあれを感し彼小吉今の勇士  
 なり先達て務員の時此鋒先を免しハ突し軍神の加  
 護なりと大に悦で他事なく弛走ありされハ一色も十分  
 小威を示し場海を及ぶ時多賀岩念はよこれを送て厚く  
 物物ありされハ一色恩を謝して路を急し折節森雨あて  
 利根川以の外流氷して渡り止し止らんとし一色等山至  
 て船を僅きよ船頭風波の危きを以て去るは一色目を待  
 ち水を落しととと急なる一色女も聞入とト知し  
 て船を出させし小船頭力なく人を擡で漕かせバ一色也  
 らりと乗り移り移り郎等十人討回船もく棄せとに川

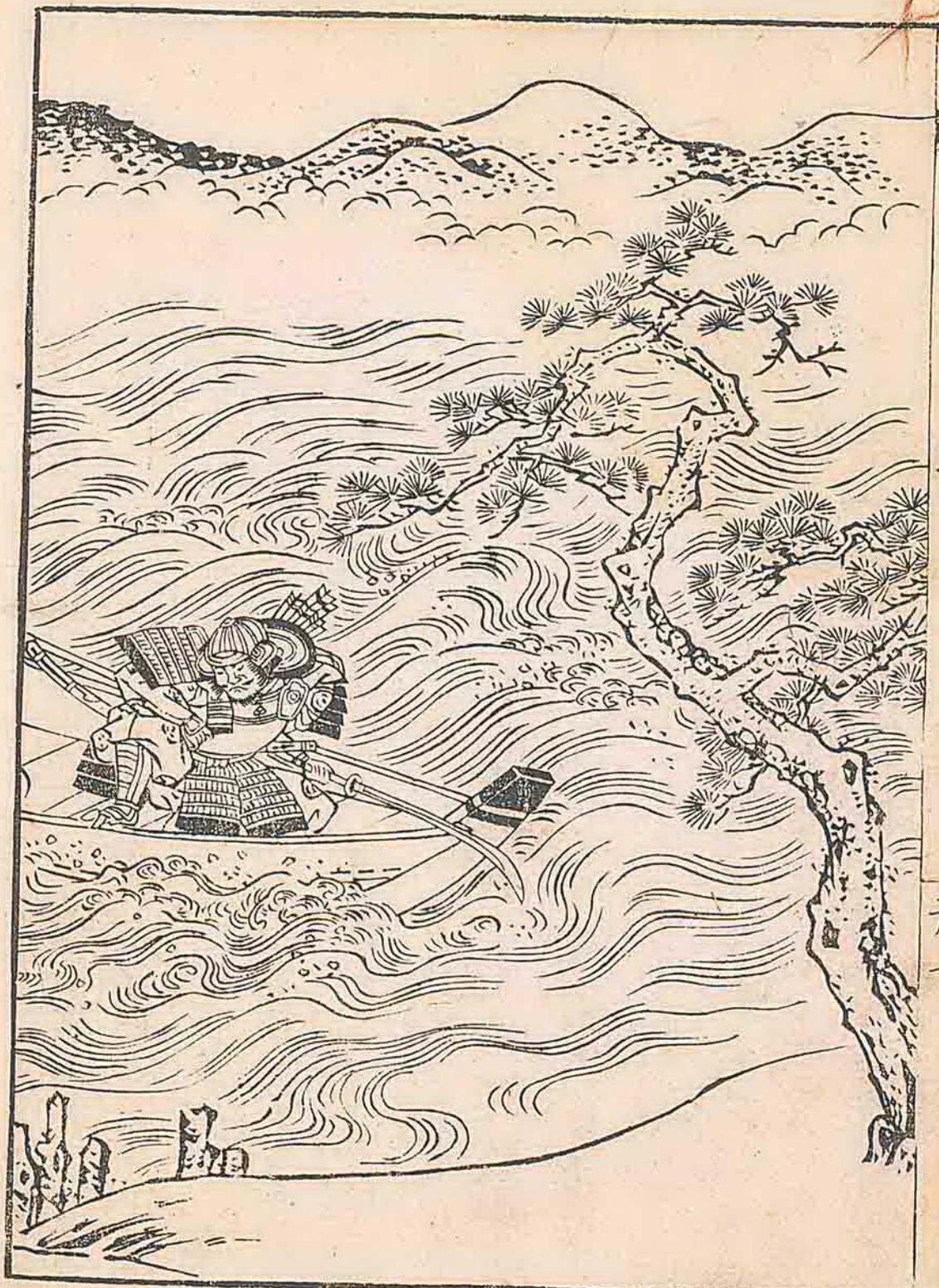
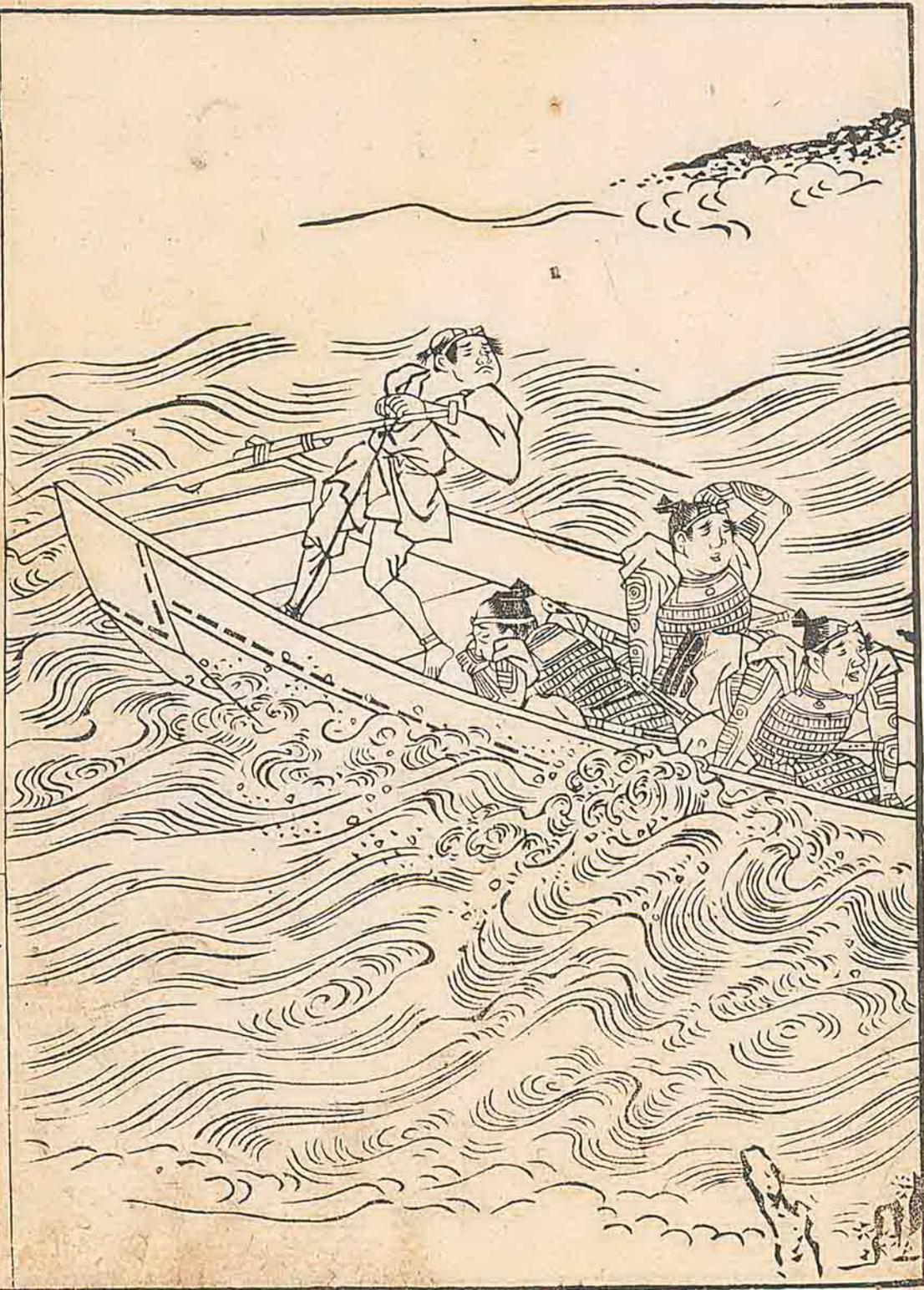
幅一里は餘り水の早きこと矢のどし時範ちのとも怒  
 るど、お孫よよりて眺望など時よ味岡五郎等官右衛  
 門と云者船頭小交り居て透波を勤るが主人性年此  
 一色が為し付けしを思ひ出して恨骨髓小徹し一色が何  
 心なく舷より立ちし時ふしを握り不意に起て突きまは  
 思掛なく一色時範水中に落入りし官右衛門小刀を抜  
 くと因しく水中へ飛入りされハ郎等共大に驚てたし水中  
 小飛入んとするを船頭これを制しされハ獲を以て七  
 八人の船頭を悉く殺し水中を見るよ一色獲しと云た  
 水練小達せとて竟し水中小死て二人の死骸浮き上りた  
 尸郎等急ぎ船中へ引揚てこれを片々官右衛門が  
 肩骨を握りしる所骨碎て死て未放さど種々ふしと

され共其甲斐守多丸バ泣く死骸を擡て新屋形より掃  
 みぎの次第を申しけり。義連大は驚き悲のひ涙を止め  
 兼一色ハ吾仇牙なり何ぞ早く吾を捨せりと悔惜  
 給ふ。是罪なり。長尾始め城戸山形悲傷は堪へ一色ガ  
 妻是を聞くと其死骸をあつめて女も歎く。諸人色を  
 忍くもるが。いづれ下知して近邸の寺家へ送て其死骸を  
 焼く火熾なる時懐飯を脱し突立て火焰の中へ飛入て  
 小室くなりぬ。時誕生年卅五歳妻女廿九歳なり。此夫お  
 りて此妻あり。一色義を結ぶより千軍万馬の同粉骨を  
 受て功未なり。至るまでして非命の死を遂ぐ。嗚呼天  
 なり誰を恨んや

足利左京亮源義連逝去附長尾遺物為明急死事

美真方自殺竹澤泉湯死之事

今歲弘治元年如何なる年や。去年小指半七郎歿し  
 今年一色左郎左衛門変死なり。されバ大將義連二人  
 の死別を悲く食減し形害憔悴して九月の末より寒  
 熱共小発し病大に危急小及び共ハ奥方を始とし長尾  
 城戸山形始ハかりろめの事と思かり。心を尽て側を  
 放れさりしが。次第に精神衰へ給へバ入替て病を癒け  
 食を進め醫を撰み茶を用ゆると云共一園と其強弱  
 冬山至る一日病の暇長尾城戸山形其外鷲塚以下の  
 近臣等を召集め吾不肯なりと云大足利の藤流み  
 と。乱を制し一度天下太平の業を乞んと欲する。若我  
 を佐く子幸多苦し大切漸くその墓をなす。是全く



我武徳よあらざらば。長尾が智謀衆の秀諸英の勇武群を  
勝るにふまはり。され今疾に掛く極て全瘡せざることを  
知れ。我死せば近邑皆替ん。軍命の傾く所智も用る  
所なく勇も施す所なく。と云。大御邊等於志を堅  
して龍丸を捕作してせめ。一城を安んじて。後來の計  
をなす。され。氣息激く。て宣ひ。され。為明を始  
低。して。涙。又。む。び。居。る。り。が。長尾。漸。に。申。る。る。ハ。魚  
を。煩。し。給。ふ。と。な。れ。力。一。変。事。あり。と。云。也。諸士金鉄の  
志あり。若君を輔弼して大切を顯んと何の疑ふ所あり  
ん君の病惱甚しと云へ。未壯年少して精神未減せず  
よく保養をさ。ハ何ぞ快復をさ。ことあり。んと申。れ  
ハ義連も氣力心よく。て。諸士と。皆。く。軍中。の。供。務。を。な。す。

昏く御次へ立ち。義連一人燈火の下小坐し。給ひ。う。  
忽然。と。一。色。小指。帝。の。と。く。例。あり。義連。大。に。悦  
給ひ。吾。色。小。指。人。を。泉。下。の。人。なり。と。せ。し。に。如何。して。角  
常。に。復。し。ら。る。と。尋。給。へ。バ。二人。平。伏。し。と。君。先。を。死  
を。早。し。大。業。の。一。臂。を。欠。くと。某。等。の。慎。の。なき。よ。ま。り。  
然。る。君。今。臣。ら。を。中。て。也。永。く。君。臣。の。因。を。た。よ。せ。ん。と。と。  
これ。よ。の。と。遠。く。來。れ。り。と。申。給。て。主。船。なり。義連。受。て  
む。色。を。と。く。小。指。一。色。と。呼。給。へ。バ。長尾。城。戸。山。形。大。に。怪  
ん。と。近。來。り。橋。子。を。問。ふ。義連。始。と。さ。と。り。右。の。号。事  
を。語。り。吾。命。且。今。あり。汝。等。は。あ。ま。く。後。事。を。全。せ。よ  
と。病。苦。志。さ。り。に。て。打。卧。給。へ。バ。人。目。と。目。を。見。合。と。  
潜。然。と。して。力。を。失。ひ。夫。り。例。を。な。れ。を。精。力。を。尽

是と云た日を追き疾重り十二月十二日夕刻とて逝去  
 ありけれバ、奥方始之臣近士、進發より、離るることお  
 りとぞ。行年卅四歳也。大小上下、闇夜、燈の消るる如く、  
 悲哀の色、数里より、角と果ぶると、争れバ、長尾下知して、  
 進發を止め、諸方の固を申渡し、城戸山形を招て、余、  
 限あつて、主公より、別骨、肉裂がごとし、痛悲、誰り、違へき、然るれ  
 う、既よ死し、近きを、知る、万一、某死せば、奥方若君を、携て、親  
 兵を、後へ、城戸持廣安房、固へ、渡り、里見義弘を、頼て、世の中  
 を、傳り、給へ、吾己より、里見親より、て、おすの、情を、通下を、り、  
 季照ハ、殘兵を、以て、屋形を守り、若君居住の、とく、ありて、城  
 戸の、落着を、守届て、屋形を、燒捨て、房へ、入り、たよ、若君  
 を、輔佐せられよ。日暮里、玉繩、深く、眼を、含居、まを、承く

爰小屯、まへ、うら、と、生死、計る、べう、と、故、み、此、首を、還る、の、こ  
 と、繕り、た、まへ、お、人、領、事、心、の内、は、怪、し、う、其、お、よ、及、と、為  
 明、礼、服を、着、し、端、坐、して、眠、る、と、く、息、絶、つ、り、時、は、此、七  
 歳、なり、君、臣、水、魚、の、交、と、な、る、生、て、道、を、向、し、死、て、時、を、違  
 へ、ぞ、是、亦、一、奇、事、なり、痛、哉、義、連、天、性、寛、仁、大、度、み、し、て、  
 衆、人、を、哀、憐、し、勇、威、逞、く、し、て、万、人、恐、伏、す、古、今、無、双、の  
 名、將、維、り、此、上、よ、出、べき、惜、業、為、的、情、識、多、智、才、文、武、を、兼  
 奇、計、神、を、走、し、勇、武、群、小、香、所、古、の、智、將、と、稱、る、人、誰  
 う、抗、衡、せん、や、天、此、賢、君、臣、を、降、して、却、と、これ、を、早、也、と、  
 人、事、の、計、る、所、は、あ、ら、と、城、戸、山、形、范、廷、と、し、て、神、志、記  
 て、麻、の、と、く、な、れ、た、忠、誠、ち、ん、ず、接、ん、君、臣、の、葬、送、と、の  
 と、く、い、と、も、一、家、中、小、雜、を、申、渡、し、る、と、後、来、を、約

して退散せし者多しと云々堅破の義士三百餘人死を  
 決して残りぬれば時を移さば房州へ赴くの手段を  
 せり。初七日小當て竹沢平治泉崎至親義連の墓前  
 て自殺して殉死をなすと二人幼年より義連に從て忠義  
 他は異なり。謂べし義士なりとを所より東方城戸の妻  
 と自殺あり。此書を城戸山形に給ふ當家運拙しく二  
 士幼君を輔佐し我生て幼君と共にありハ寛急心よ任  
 せざる事ありんと云々先君と同穴の約を盡へて生害  
 小乃自由なり。持廣が妻死て夫を励むの書あり是亦流  
 季の奇傳ふして女子にして大丈夫なる者ハ賢乎貞乎  
 賞さるるは餘りあり

小張落城 附 鹿島忠次郎討死之事

義連逝去あり之近邑皆離叛せり。小張城中より鹿島忠  
 次郎先達て小楯一色が変死を聞て大に悲傷かりける  
 小増て義連の病氣を傳て心次第に愁て透波を渡來  
 して之を消息を窺ふる小急使ありて之を變を告ぐられ  
 悲恨胸に塞り。一声叫ぶ地小倒るるを家人助かす  
 漸よして人心地つさば城保外をめぐると決して城中  
 の士卒は五公の逝去を告て皆離散せしむ集勢多逝去  
 之義黨廿六人決然とて残り居れば鹿嶋大に賞嘆し  
 一先城を圍て新館小馳行城戸山形と相謀る。竜丸の  
 行末を安居ならしめんと。そより又度々せしむ只越々  
 守変事を傳ゆ今ハ准を恐んと。四百餘人を從て  
 急よ起る政結し。鹿嶋ちのとも驚す。廿餘人の者

を下知して、防矢殿布射させ、寄手の人数ひるむ所を  
木戸を開く切て出る。すも鹿嶋とて出たれと、一回は鹿嶋  
掛るを、ゆるりと鹿嶋と進み、今日を完結と思ひ  
これハ精神一倍加つて、打右刀先稲妻のどく、哲時の内  
小死人の山を築より、奇功下知をかりて、鬼竟の射  
手を揃へ、四方小列れて射立しり。廿六人の兵一騎も残り  
す思ふに討死して、今ハ鹿嶋唯一人退く心、動もたなく、  
八方へ切て廻り、大水おなりて戦し、身も五矢数をちり  
ず、仁王立よ立て、竟ハ八方より射さくめられ、右刀を逆  
様ニ突く、眼を開く死く地ハ傷き、哲ハ恐れて寄る者  
なかりしが、時刻移れば、初く討死を悟り、死首を奪く  
再城を返せり、哲時の勝勇、奇功下知が、勢百十餘人

討死せり。鹿嶋生年卅二歳、悪次良、劔術万人は勝れ、小  
指と一奴の英玉のどし、武勇紫樹の幸し、さるのどく、  
らど、忠義の心、金石のどく、無雙の英士あり、さるが、運  
命拙して、一戦の上、命を落とす。少人おれを惜むと、と  
なり

足利竜丸城戸次郎右郎持廣入水事

附勢塚以下義死之事

弘治二年の春、城戸持廣ハ山形季照と相討して、密に房  
州へ竜丸忍行し、赴を申越り、さる、里見義弘、細川あり、  
我義連と一面の交わり、と、武徳を傳す、通略  
か、とん、と、欲れた、國家、強壯、して、事、及、は、然、る  
小創業、ま、な、り、して、義連、年、去、あり、諸侯、多、き、仲、り、

て我は狐を托も。誠小義のある所辭はさうらうと成五の  
 間安居聊も疎畧あるまじとありければ城戸の形火よ  
 悦て乗懸る百五拾人を附て屋敷に残り、竜丸在館の妙よ  
 して城戸の夜よ紛きて幼君を携て、忍やうよ上下千人  
 計めく二百里を過ると警塚熊左郎、志賀彦惣原十志  
 夫根本伊之八、其外近臣の英士元務、餘彼意して池集  
 也。惣人数五十餘人となり陸地を遠く行んあり。海上  
 より房州へ出よ至んが便ありと、石黒彈右衛門を  
 先達て船場へ着越て舟を控へ、船路を令せしめ、跡より静  
 小押行の樹木茂りたる所まで。左方より数十人あら  
 つき出、それへ来るは落人となり、心よく衣袴を控へ  
 て立行る。ちうらハ命を助さんと、一同に切りあれば

警塚先小立向て己れ原いづこの盜賊なるや、警塚熊  
 左郎、主君の用事ありと、徳州へ赴く道まで吾をいざ  
 捕んとハ運のそと子、愚人なると大音よえければ、警  
 塚がござんがれ義連死去有て浪士となりたるあらん  
 遠く小降参せば、重く用とく武勇を顕さしめん。我くハ富  
 永四郎左衛門の軍勢なり。熊若より落人あらんと察  
 し、此所小屯せりと叫びるまじ、警塚大ハ腹を立て、落人  
 とハ奇怪なり。兼て自らハ知りつらん。出物見せんと大  
 右刀を援持て、一文字も切て加れば、大勢開く取圍ハ熊  
 左郎いさこをす。四角八方へかきこえれば、案に相違し  
 左方ハ門と散る所へ、志賀彦惣根本伊之八、右刀援ら  
 ぎ、縦横に切くおれば、何うハ敵せん。我をとらうと逃

行し。思もよらず跡の方より。亦一手の人数押せ。押  
 丸巻んと。浩ある原十を先鎗押して。先よ進む者大  
 を六七人突伏れば。避易して。さきよゆ。城戸持廣大音上  
 て掛る。若殿原と下知と。さきよゆ。十五六騎の勇士も。一回  
 切く掛り。片端より難立れば。大勢四度踏より。され  
 大将と。かゆき者色をあげ。例の曲者共多く集り  
 居り。さきよ。みどりよ。戦く。人数換り。計ならん。早引と  
 れと下知をす。さきよ。先よ。逃出れば。諸勢ゆより。と。前立  
 跡方もなく。後走なれば。城戸前後の人数をす。められ  
 八討死手負一人もなく。敵勢を打捕ると。五六十及け  
 れ。巴門出より。幼君の武運のひらけ。は。と。上下大よ。勅命  
 と。船場よ。至れば。石里船をよ。う。ひ。て。至。後。され。打。棄。

綴。成。解。を。を。出。し。房。恐。う。て。さ。り。を。る。が。船。取。可  
 海よ。至。く。大。氣。和。融。して。濤。平。う。なり。られ。ハ。大。よ。後。く  
 数。里。漕。行。く。が。洋。中。め。く。俄。よ。風。落。雪。起。く。海。上。暗。夜。の  
 と。く。高。波。天。よ。漲。り。て。船。暫。も。す。ら。う。と。今。改。よ。破。船  
 の。跡。な。れ。バ。城。戸。大。よ。恐。れ。て。船。取。を。召。く。回。ら。る。ふ。船。取  
 申。ら。る。ハ。一。艘。の。小。船。を。繫。ぎ。置。れ。り。さ。き。よ。一。面。人。集。り。結  
 ぶ。其。等。力。を。さ。き。よ。て。助。く。ぬ。く。大。船。を。全。く。さ。き。よ。と。ふ  
 あ。さ。き。よ。る。所。な。り。と。さ。き。よ。獲。兵。在。候。と。幼。君。を。持。廣。よ  
 抱。う。せ。急。よ。小。船。へ。移。し。つ。殘。す。聊。も。恐。る。く。形。た。り。し  
 船。取。力。を。さ。き。よ。て。棄。出。せ。ん。突。や。小。船。浪。よ。棄。て。置。る  
 處。を。梯。子。な。し。け。れ。バ。船。中。め。く。皆。く。怪。し。望。々。る。よ。天。運  
 の。さ。き。よ。所。如。何。と。も。な。し。と。危。う。と。と。一。轉。の。風。側。より。起

て幼君の小船を真逆様へ吹送せば、船既残らば、引  
 れど城戸一人片手も幼君を差上りて、片手も船を起ん  
 とされど、風つよく波荒く、船ハ次第遠放りあつたの  
 船もく回音もあれよくとれ強と、船近寄るも、船も  
 なし、城戸ハこれ天守のある所なりと力を尽して何  
 なく船を引起し、棄らんとせし所も、入りや海風落  
 掛て、此船を吹立て、側の巖石も當て、激塵も、船も失  
 くれ、城戸ハ精刃つれ果て、既ハ海水小溺れられ、幼  
 君を差上り、暫ハ幼君の形見へなるが、一圍の大浪も  
 至、後の形打込れ、跡方なく成り行ハ、惣兵回音も  
 色をよき大も突し、勢塚熊右郎真先も腹切く、海  
 底へ飛込ハ、續て北餘騎の勇士指遠く皆海中へ落

入り、残る義黨北餘人何も狂騒なく腹切て、深く殉死  
 せり、哀れなり、なる有様なり、竜丸僅ハ六歳、城戸次郎  
 右郎持廣ハ五歳、城戸義連ハ後ハより、殊更の電臣て  
 形影の如附、後ハ孤托を受く、其切をなすとあつた、是  
 精誠日を費の忠徒ハ海中、小残も賞も多し、人たる  
 ハ、勢塚なり、始不義の業ハ、立たる、執然として志を起  
 し、義連、小後と忠心女も挽す、武勇戦功、竜虎の五臣  
 小亞く、功遂ハ、益なく、一旦ハ義ハ死と惜へし

新館焼亡、附ハ、形ハ、即ハ、李照夫婦、義死事

富永四郎左衛門ハ、義連の死去を聞くと、此藥も、新館  
 を棄取去、年ノ恨を晴さんと、密ハ、人教を自分して、都  
 合一千人追々道を替へ、沓原におく、一手となり、急

進んで鎧を取寄時をどりどり山形八郎季照  
 兼て覚悟のとくすれバ女も遅疑せどら一通り射出せど  
 ひろく一番り余出して奇手の中へ一文字の余出前  
 後左了近立れば一陣追寄され二陣と竟入替ふ山  
 形馬足を休めつ又も人数をすめつをめて掛れハ  
 富永自身は馳合せど山形と暫く戦て叶まて逃て  
 行山形頻々しあし浩きバ富永亦踏止り戦をなすれ  
 大路を奪てぬまれば山形勢は棄て追々ま左右村ふ  
 りと小道あり左右より伏兵起り熊手を忍て人馬も  
 引倒せば流石の八郎馬倒せど其身もどろどろ落起上  
 んとせしとありを折重となんなく繩を掛りたる富  
 永大に悦ぐ館の四方を以巻く火を掛まバ山形も妻女

甲斐く布鎧を着し長刀掲げ大勢の中へ掛入と七八  
 人切倒し然れ多勢の人数より足どり打傷てこ  
 れをも回く生捕りり百余人の義黨一人も退散せど抗  
 を並て討死せり館ハ一時の煙とすめて其跡方も見  
 ざりたり勢塚新館を管てより僅小七年りて焼亡  
 す富永いさよ悦と己居城へ立入り夫婦を引出し  
 対面する小容貌俊美小して格も神仙のとく富永念  
 以て養して氏康は仕て英名あらしむと爲つとと  
 れバ山形眼を怒りて足利義連の家ゆ大小上下婦  
 女たよ死て義あるとをある生く不義をなすとを  
 事と後養る河なり日わのく竜丸城戸入水の汝は  
 を聞りりも夫婦食事を止めいよ勧む食せど

眼を眠り安んじて断食十二日を経く。夫婦同時息  
 断より季照於五歲たり。爰に於て七星感化の君臣之  
 年の間中して悉く早世しぬ。天徴わやまらず。此豪傑  
 を下しと。英名天下に傳るとまよ及に苗よして搗れぬ年  
 数僅の間にして。諸家土民暫ハ称嘆なり。これた東國  
 多事少く興亡日ふ替り。兵火に記録を焼亡し既  
 小天正の末に至るこれを知る者亦稀なり。後世に英名  
 不測の信義湮滅せんことを惜み道人の傳し口傳を  
 州に備豪傑の傳記神変の事跡多しと云々。是迄  
 既よ多く僅よ十が一を録して子孫に傳るのこ天正十  
 八年。庚寅十一月筑波山下に隱士。之本成久記

# 書 林

- |           |        |
|-----------|--------|
| 京都寺町通佛光寺  | 河内屋藤四郎 |
| 江戸日本橋通壹丁目 | 須原屋茂兵衛 |
| 同 貳丁目     | 山城屋佐兵衛 |
| 同 貳丁目     | 須原屋新兵衛 |
| 同本石町十軒店   | 英 大 助  |
| 同浅草茅町貳丁目  | 須原屋伊 八 |
| 同芝神明前     | 岡田屋嘉 七 |
| 同神田旅籠町壹丁目 | 紙 屋德 八 |
| 大塚齋橋通博労町  | 河内屋茂兵衛 |
| 同心春橋通本町角  | 河内屋藤兵衛 |



